

ヒラメは何時・何処に放流すればよいか

～ヒラメ資源増大のための放流効果の向上を目指して～

研究員 川口 航平 (水産研究所)

1. 背景

本県では、栽培漁業の一環として、毎年8月ごろに約8～28万尾のヒラメ種苗が県内各地先で放流されている。

平成13年度から19年度に放流したヒラメ種苗の回収率は、平均3.4%であったが、漁獲量の増大を図るためには、この回収率(放流効果)をさらに向上させることが求められている。

2. 研究成果の概要

県内の地先海岸で採捕された天然のヒラメ稚魚の肥満度を調査したところ、環境中のアミ亜科(餌生物となる小型甲殻類)量が多い場合に肥満度が高いことが分かった。

肥満度は栄養状態の指標となることから、本研究では、ヒラメ稚魚の生息環境として重要なアミ亜科量を、県内の地先において調査することにより、ヒラメ種苗の放流適期、放流適地についての検討を行った。

1) 放流適期

県西部では6月中旬から7月上旬、県中部及び県東部では6月中旬から7月下旬にかけてアミ亜科量が多く、放流時期として適切であると考えられた。

また、現在、主に放流が行われている8月には、どの地先でもアミ亜科量は少なかった。

2) 放流適地

水深5m～10mでは、どの地先でもアミ亜科量が多かったことから、沖合(船)で放流する場合には、海底が砂地であれば良いと考えられた。

水深1m以浅では沖合と異なり、塩分の低い地先や潜堤等によって囲まれた地先では、アミ亜科量が少ないことが分かった。このため、海岸で放流する場合には、高塩分下で、開放的な砂浜が、放流場所として適切であると考えられた。

3. 成果の活用

本成果により、アミ亜科量から見たヒラメの放流適期・適地が明らかになった。

現在、栽培漁業センターの施設増強が行われており、完成後には早期大型種苗の適期放流が可能となることから、適地放流と併せて実施されることにより、回収率の向上が期待される。

水産研究所では、今後も市場調査等によるモニタリングで回収率を継続して調査し、放流効果を明らかにしていくこととしている。

研究成果の概念図

現在のヒラメの種苗放流

放流尾数: 8~28万尾
 平均放流サイズ: 80mm
 放流時期: 8月ごろ
 放流場所: 県内各地先

課題(回収率向上のために)

- ・8月は水温が高い
- ・放流場所は人の都合で決定

もっといい時期・いい場所で放流できないか？

放流適期・適地調査

ヒラメ稚魚の肥満度(栄養状態)
 にはアミ垂科が重要



県内各地先のアミ垂科量から
 ヒラメの放流適期・適地を検討

適期

県西部: 6月中旬~7月上旬
 県中部: 6月中旬~7月下旬
 県東部: 6月中旬~7月下旬

適地

沖合(船)で放流
 する場合

海岸で放流
 する場合

- ・海底が砂地
- ・高塩分下の地先
- ・開放的な砂浜

来春完成予定!

滑川栽培漁業センターの
 施設増強



早期・大量放流が可能に

適期・適地放流の実施

資源管理

- ・全長25cm未満のヒラメの再放流
- ・ヒラメ刺網漁業における網目拡大
- ・小型ヒラメ多獲時期における操業の自粛

回収率の調査

市場調査によるモニタリング



生残率の向上

回収率の向上